

本来は皆さんの前で話をするはずですが、コロナウイルスの関係で終業式が開催できませんので、校長の話を文章にして掲載します。

皆さんとは2月28日以来会っていませんが、元気に過ごしているでしょうか。1年間のまとめの時期に級友達と学校で授業を受けられないのは大変残念なことです。先輩の卒業を祝福するための卒業式にも参加できずどれだけ残念だったことでしょうか。また部活や来年度の光慧祭のことを考えると、居ても立ってもいられない気持ちでいる生徒も多くいることと思います。このような事態は戦後日本の歴史の中でも経験したことのないことです。皆さんは普段忙しい高校生活をおくっている時には、じっくりと物事を考える暇もないでしょうが、現在のように通常の日常生活がおくれない時こそ、これまでの自分を振り返り、そしてこれからどのように高校生活をおくるか、将来どういう形で社会に貢献してゆくか、などについて自分との対話をするのには良い機会だと思えます。さらには普段充分時間の取れない読書にも時間を割き、これからの日本、これからの世界についても考えて欲しいと思います。

私はこの3月で退職になりますので、最後に、前女生に期待したいことを述べたいと思います。

昨年、世界経済フォーラムが調査した「ジェンダー・ギャップ指数」が発表されましたが、日本は世界で121位という残念な結果でした。特に政治の分野での指数が低いようですが、会社や官庁等での女性管理職の割合も他の先進国と比べ低いと言われています。大学受験では、一昨年、東京医科大学で女子受験生に不利な合否判定が行われていることが判明し、私立の医学部を中心に多くの大学で同様の傾向があることがわかり世間の非難を浴びました。しかし、これからの時代、急速な科学技術の進歩そして少子化を考慮に入れると、女子の社会での活躍がこれまで以上に必要であり、それなくしては日本は活力のない国となってしまいうでしょう。AIの進化により、これまでなかった仕事も多々生まれてくるでしょうが、そのためには男性中心の発想では対応しきれず、女子の感性や発想がきわめて重要になるでしょう。またこれまで男性の仕事と思われていた分野でも女子が活躍することで、その分野がより活性化されるはずです。

そのような時代にしてゆくためには、男性中心であった社会が変わらなくてはならないことは言うまでもありません。ただ、当の女子自らが「女子だから」と、自ら意識的にせよ無意識的にせよ身を引いてしまっているということはないでしょうか。身近な例で言えば、日本で最難関の東大の入試についてはどうでしょうか。そもそも今年度も女子受験生の割合は全体の20.5%しかおらず、合格者の割合にいたっては全体の18.5%という結果だったようです(前女生は大健闘し、今年は合格者が浪人を含め4名となりました)。もちろん東大だけが大学ではありませんが、この男女の違いは何を意味しているのでしょうか。

皆さんにはぜひ「女子は・・・」という言葉に疑問を投げかけ、吟味する努力をして欲しい。「女子は数学が弱い」という人がいます。それは本当でしょうか。女性で数学の得意な人や大学教授はいくらでもいます。「女子は大学受験で最後伸びない」という人がいます。それは本当でしょうか。今年の卒業生は2学期以降の伸びは大きかったです。浪人して希望大学に合格した先輩も少なくありません。ぜひ「批判的思考力」を鍛え、これまで当たり前だと思われていることを疑い、自分でも無意識のうちに持ってしまっている固定観念を打ち破って欲しいと思います。

社会は変わってゆきます。私大医学部入試では、昨年度の受験から女子の合格率が男子とそれほど変わらなくなりました。変化は決してこのケースのように早くはないかもしれませんが、社会は確実に変わってゆきます。それは歴史を見れば明らかです。ぜひ皆さんには高い志を持って、これからの時代のリーダーとして活躍することを期待します。